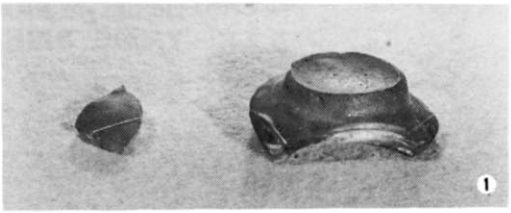
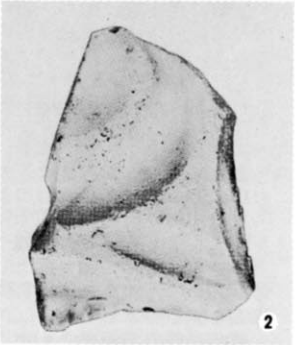
日本出土のペルシア瑠璃碗をめぐって



正倉院所蔵の白瑠璃瓶や白瑠璃碗はおそらくササン朝ペルシア製のガラス器と考えられています。また、大阪府堺市安閑天皇御陵出土と伝える玉碗と奈良県橿原市新沢千塚古墳出土の瑠璃壷（ともに東京国立博物館蔵）も、やはりペルシアのガラス器と推定されています。これらの器物は古代に遠い中東地方で作られましたが、シルク・ロードを通って中国にもたらされ、さらに海を渡って日本に運ばれてきたのです。当時の交通が極めて不便であったことを思うとき、古代の日本人が異国の透明なガラス器に寄せた夢がしのばれます。



今秋の「東洋のガラス工芸名品展」には、日本で出土した2種の瑠璃碗の断片が陳列されます。その一つは福岡県の宗像神社の所蔵で、九州の玄海灘の孤島、沖ノ島の祭祀遺跡から出土したものです（写真1）。もう一つは京都市の上賀茂神社の境内で拾得されたものです（写真2）。この二種の断片は、凸出した円文様のあるガラス碗の断片で、もとの碗は3世紀から7世紀にかけての間にイラン高原で作られ、はるばる古代の日本に運ばれてきたものと思われます。

これらの断片のもとの姿を想像させるものとして、今回の特別展に「凸出円文切子碗」（遠山記念館蔵・写真3）が陳列されます。こちらの方は最近イラン国のギラーン州から出土したカット・グラスの碗ですが、やはりササン朝ペルシア時代の3～7世紀ごろの製作と考えられます。このような凸出あるいは凹面の円形文様は、古代の西アジアのガラス器において大いに流行しました。

沖ノ島や上賀茂から出土した古代ペルシアの碗の断片を見つめていると、葱嶺流沙（そうれいりゅうしゃ、パミール高原とタクラマカン砂漠）を越えて、遠く中国をめざす隊商のラクダの鈴の音がきこえてくるようです。また、遣唐船を苦しめた玄海灘の波の音が響いてくるようです。

季刊 美のたより No.37
昭和51年10月15日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.